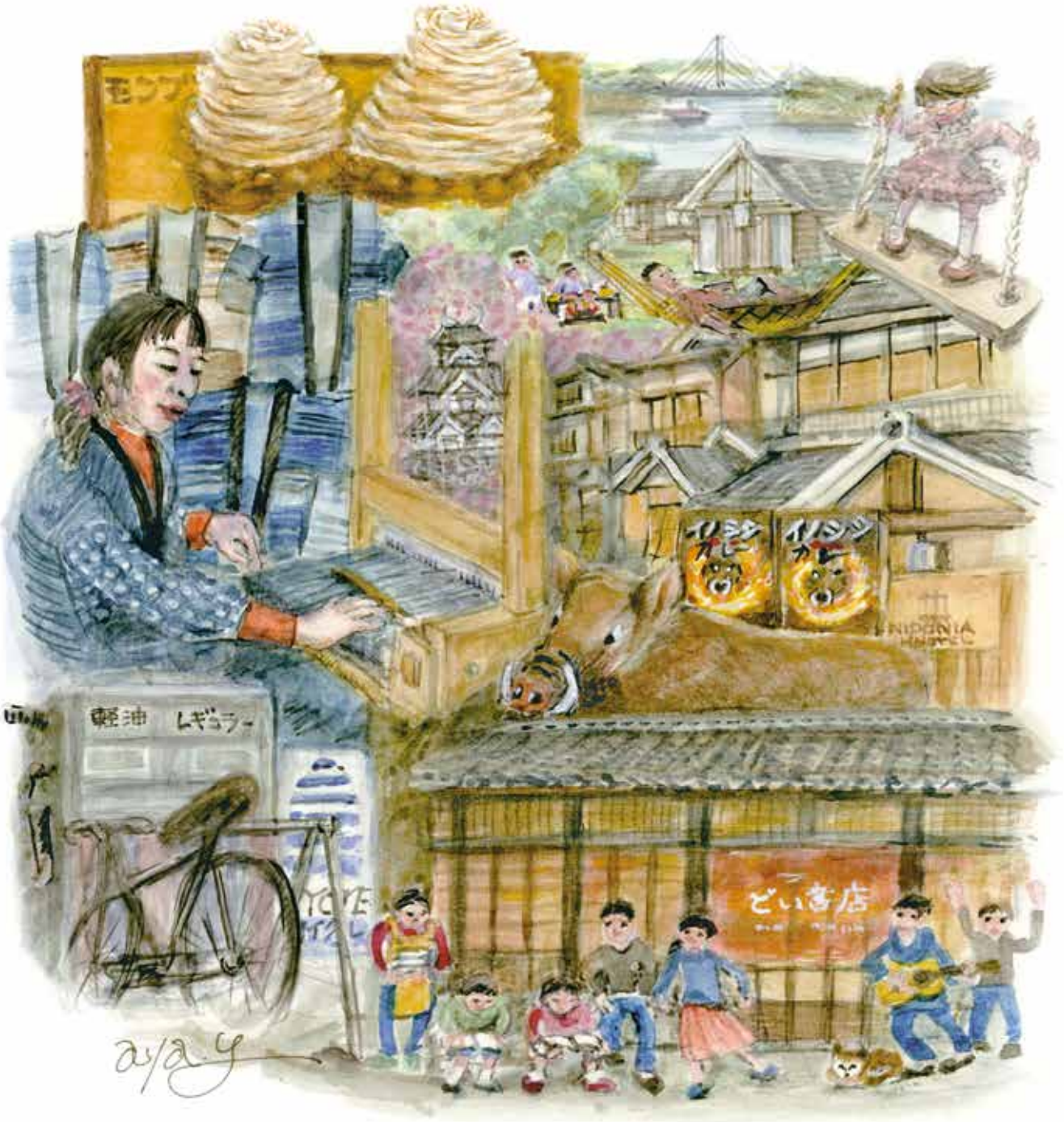
まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

Vol.148
2022.3

特集 移住とまちづくり
～移住者による地域活性化～



vol.148
舞たうん
【題字】愛媛女流書家連盟 会長　藤岡 抱玉

■はじめに

2020年度の愛媛県への移住者が前年度29%増の2460人で、統計を取り出した2007年以降過去最多であった。特に20代、30代の若者の移住が目立ちその割合が5割を超えている。ライフスタイルや働き方の多様化が進み、多くの若者に従来の都市志向から地方志向が広がっており、またICT化の進展等もあって時や場所を選ばず仕事が出来る状況も確実に現実のものとなっている。

実際、地域によっては若者を中心とした田園回帰といわれる都市部から農村漁村等への移住が多く、地域おこし協力隊員をはじめ、新しい仕組みを生み出し変化を引き起こすことができる人材が地域に入り始めている。

今号では、「移住とまちづくり～移住者による地域活性化～」と題して、移住者が各市町で地域活性化をしている取組みを紹介し、地域にもたらす効果や今後の可能性について考えていきたいと思います。

（研究員　玉井　伸幸）

■表紙のことば

今回、地域外から地域住民となった移住者や地域外の人材も、地域づくりの担い手として重要な役割を果たしている。移住者は、地域住民が気付いていない地域の魅力・価値を発見し、地域は移住者と交流することを通じて刺激を受け、自身と誇りを取り戻すことが多い。それは出身者であっても同様で、かつては気付かなかった地域の魅力・価値を見つける可能性がある。また地域外の人材が地域内の内発的エネルギーと結びつくことで、地域の主体性を引き出し地域づくりを継続的な活動にしていくことが期待できます。これからは地域住民だけ担うのではなく、移住者と共存し少しでも地域を発展させることが責務であると思います。

柳原あや子

●アングル
移住者がつくるまちの交差点
～ひとりの羽ばたきから、変わること～
山口 聡子／南予移住マネージャー …… 1

●特集／移住とまちづくり
～移住者による地域活性化～
①移住からはじまった新たな働き方とワーケーション
特化施設「OMISHIMA SPACE」について
増田 茂樹・徳見（増田） 理絵／株式会社オオミシマワークス …… 4
②移住者を増やすための空き家活用について
井上 陽祐／一般社団法人キタ・マネジメント 企画課 係長
兼 株式会社KITA 代表取締役 …… 6
③移住者はお客さま?!
岡山 紘明／内子町地域おこし協力隊 …… 8
④栗産地で栗スイーツを作り、栗と産地の存在価値を高める
藤田 恭裕／合同会社メニークエスト 代表 …… 10
⑤好きは果たして仕事になるのか、伝統をつなぐための工夫
橋田 豊代／コーロク株式会社 代表取締役社長 …… 12
⑥「地域活性化」はオーダーメイド
地域の数だけある活性化のカタチ
菊池 睦／合同会社 ひととせ 代表社員 …… 14
⑦道の駅を拠点とした地域おこし
江ノ上 敦士／久万高原町地域おこし協力隊 …… 16

●地域おこし協力隊 リレーレポート
大好きな双海を守りたい!あらゆる方向から「双海最高」を全国に
上田 沙耶／伊予市地域おこし協力隊 …… 18

●えひめ暮らしネットワーク通信
えひめ暮らしネットワークの活動について
千々木 涼子／一般社団法人 えひめ暮らしネットワーク 事務局長 …… 20

●特選ブログ／shin1さんの日記
移住者による地域の活性化
若松 進一／人間牧場主・年輪塾々長 …… 22

●“MY TOWN” うぉっちんぐ
東西の鉱山から愛媛の地層を見る
岡崎 直司／タウンツーリズム講座主宰・近代化遺産活用アドバイザー …… 24

●地域づくり人養成講座報告
多様な人材（人財）が主役の地域づくり
矢野 秀喜／今治市役所 健康福祉部 健康推進課 …… 26

●市町振興協会事業案内
令和4年度事業のあらまし
公益財団法人 愛媛県市町振興協会 …… 28

●Information　センターからのお知らせ
「えひめイベントBOX2022」発刊のお知らせ
令和4年度まちづくり活動アシスト事業の募集

移住者がつくるまちの交差点
～ひとりの羽ばたきから、変わること～

南予移住マネージャー　山口　聡子

２０２１年４月、私は南予移住マネージャーに着任した。南予（なんよ）とは、愛媛県の西南部にある９つの市町（内子町・大洲市・八幡浜市・伊方町・西予市・宇和島市・鬼北町・松野町・愛南町）の総称である。人口減少・少子高齢化などから、地域を支える人材としての移住促進がうたわれ、愛媛県全体としても取組みを推し進める中で、特に、東予や中予と比べて移住者が少ない南予の移住促進を強化すべく配置された。コロナ禍で、都市部の移住検討者が地域と出会うための対面移住フェアやプロモーションも、オンライン化を余儀なくされた。その反面、ＩＴリテラシーのある若い世代へ情報が届き、テレワーク化やオンライン授業化、離職、帰省のタイミングでの緊急事態宣言などは、南予への移住者増の契機になった。令和４年１月末の段階で、南予地方への移住者は前年比を大幅に上回っている。

自分の意志ではどうすることもできない状況に直面した時、外的要因に誘発され、人は生き方を見つめ直し、住まいを移すことも選択肢の一つになる。私自身もその１人であり、２０１１年から地元へ帰ることを検討し、多拠点生活の後に東京からＵターンした。ふるさとや農村回帰の地としても南予地方は、移住先としての可能性を秘めている。南予の９市町それぞれの強みと課題を活かしながら、南予全体の移住ブランド化と移住者誘致に寄与することをミッションとして、地域が人を呼ぶ態勢づくりや、南予移住促進策の提案などを行っている。

地域で住民と来訪者をつなぐ新たな場所

日々の拠点は、内子町まちの駅Ｎａｎｚｅの２階に、２０２１年に設置された「コワーキングハブ南予サイン」である。南予地方を中心とした、移住相

談の窓口のあるコワーキングスペースで、地域住民や、地域おこし協力隊なども気軽に訪れやすいように、無料で立ち寄れる空間も設けている。テレワーカー誘致の事業や、個人や法人のワーケーション受入なども実施し、外部人材と地域住民の交差点にもなっている。コワーキングスペースの会員や利用者は移住者が多く、連休には南予出身者がインターネット検索で南予サインを見つけ、帰省中の実家では集中できない仕事を行うなど、新たな人の動きが生まれつつある。南予の入口で、関係人口となり得る人を迎え、潜在的移住者が地域と関われる「つながる場＝ハブ」としての施設の運営にも携わっている。

南予サインでの東京と内子をつなぐオンライン交流会。移住者たちが集まり、内子町に来訪予定の方と交流を行った。

外に出向き、人と情報をつなぐ

南予サインは拠点としてのハブだが、私自身も「つなぐ人＝ハブ」としての機能を心掛けている。南予の各市町に足を運び、役場の移住担当職員、協力隊や移住者、地域住民に話を伺い、「それぞれの市町らしさ」としての課題と魅力を拾い上げている。同じ「地域のつなぎ手」の移住コーディネーターとも連携を取っている。その役を担っているのも移住者であることが多い。彼ら同士をつないで、ネットワーキングしていくのもマネージャーの仕事だ。大切にしているのは、情報共有と、つながりづくりである。実際起きていることや移住促進の好事例を伝えるだけでなく、直接人と人が出会える場面をつくっている。立場や地域を超えて、チームになっていくサポートのためである。まちづくりは1人ではできない。縦横無尽に行き来しながら、課題も情報もアイデアも共有し、共に向きあい、また次なる展開を生み出していく。また、地域外の「つながりしろ」を生み出す機会を外にも拡げていくために、（一社）日本ワーケーション協会のワーケーションコンシェルジュ（地域の魅力を訴求するもの）南予担当にも就任した。都市部だけでなく、全国への「愛媛・南予」の認知度を上げ、来訪につながるための関係作りも行っている。

受け入れてくれる人と地域

移住は、自らの意思で住む場所を変えることだ。そこには動機と行動があり、自分の未来を自ら選択し、つくりたいと思う姿勢がある。その能動的な気持ちで、次なる場所を選び移り住んだ場合、まちに住む人と関わり、魅力にもっと触れたいと思う。まちをみんなで創っていく一員になり、課題に対しても何が出来るかを考え取り組みたいと思う。そんな風に気持ちが変化していきながら、「訪れた人」が「住む人」になり、課題も内包している地域の魅力を抽出して、自分の興味・関心に紐づいた活動を行い「人を呼ぶ人」となり、「関りを生み出す人」になっていく。そしてまた新たに訪れる人との関わりを持つ拠点、つなぐ人がつながる交差点になる場所を誰かと一緒につくりだしているのである。

まちづくりを担える移住者を呼ぶまちには、人を惹きつける地元の人が存在し、長年地域を想い磨き行動してきた、まちづくり活動の軌跡がある。そして新たな人を受け入れたいと思い続けている。私の場合もそうだった。移住を検討し始めてから6年間、気持ちも拠点も東京と愛媛を行ったり来たりしていた。「何か地域づくりに関われることがしたい。」と思いながら、その方法を見つけられずにいた私に、「うちの地域おこし協力隊にならないか?」という声をかけていただき、自身も通っていた高校のある町、西予市野村町へ移住し、同町の地域おこし協

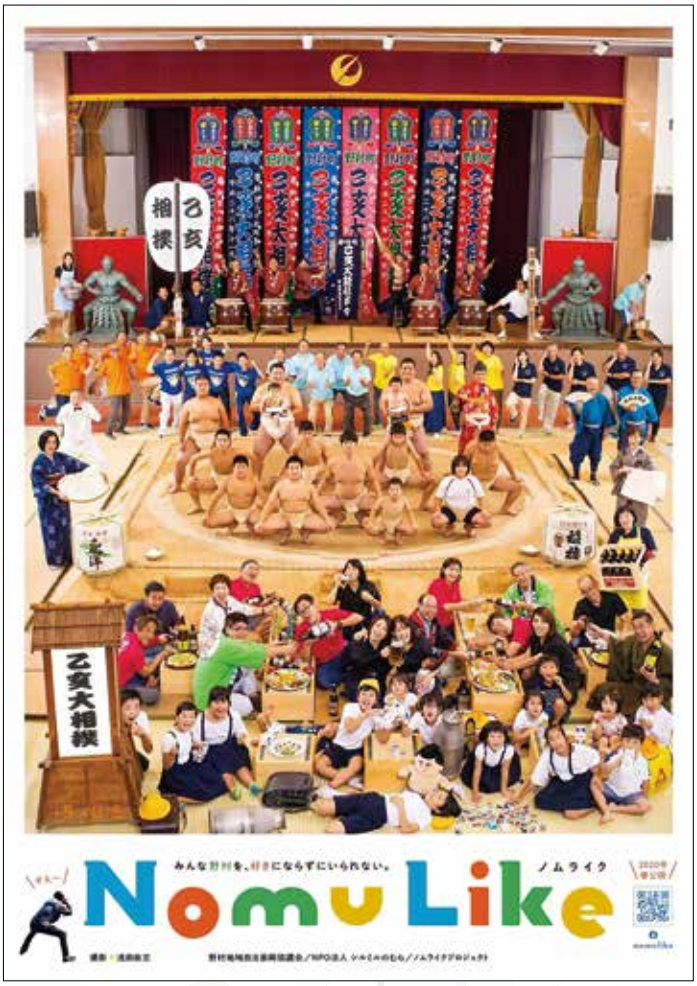
力隊に着任した。その決断に導いてくれたのは、やはり熱い思いのある、地元の人なのである。

「この人がいるなら、大丈夫。この人達となら何か出来る気がする。」そう思える、まちの土壌があることで、人は移住を決断し、その場所で輝けるのではないだろうか？

地域おこし協力隊卒業祝に受入地域づくり団体から頂いた、座布団程のケーキ。野村町のくまさん農園のイチゴを使い、地元製菓店かしはなで制作された。

みんなの羽ばたきがまちをつくる

まちに暮らす人にとっても、近所に移住者が来ることは、新鮮な出来事だ。今までにないコミュニケーションが始まる。「はじめまして。」の挨拶から、「どこからきたの？」と会話になる。新しいまなざしで、まちを見つめ、楽しく暮らす人がいるだけでも、まちの人の表情が変わる。「このまちに来てよかった。」「私達のまちに来てくれてよかった。」その喜びに、人と人との小さな交差点ができる。「まちづくりに何も関わっていないし、何もできない。」と思う移住者や地元出身の方もいるかもしれないが、存在するだけで関与していると私は思う。ニュースなどで取り上げられ、移住者が注目される輝かしい活動についても、最初は、蝶の羽ばたきのような、ささやかな動きが、少しずつ成長し、ある時を機に、大きな動きになっていったのである。移住者とまちづくりにも「自分にもかかわりがある」と思えることから何かが生まれる。関係のない話から関係のある話に変化する。それが大きなうねりとなる。そんな風に感じてもらえる機会が増えていき、そこにあなたの羽ばたきも加わることで、まちはつくられていく。



沢山の小さな羽ばたきが集まり、大きなうねりになったNomuLikeは、現在も続いている。

[大三島]
特集1

移住からはじまった新たな働き方とワーケーション特化施設「OMISHIMA SPACE」について

株式会社オオミシマワークス　増田　茂樹・徳見（増田）　理絵

OMISHIMA SPACE（オオミシマスペース）は、瀬戸内しまなみ海道「大三島」にあるワーケーションに特化した施設です。「暮らすように滞在する」をコンセプトに、テレワークや研修できる環境を提供しています。

オオミシマスペース施設紹介

HANARE

2017年にまずオープンした、築80年の古民家を改装した1棟貸切りのワークスペース付きの宿です。ワークスペース兼リビングは、床下コンセントや黒板、大型モニターが備え付けられています。また縁側には集中スペースも用意しています。ウッドデッキや青々とした芝生の庭でミーティングや作業をされたり、リラックスした環境で仕事をされている方もいらっしゃいます。

HANAREの外観

OMOYA

同じく古民家を改装したHOSTELです。6つの寝室があり、リビングやキッチン、トイレ、シャワー等は共同スペースとなります。貸切利用も可。各寝室にはデスクも備え付けられており、PC作業やオンラインミーティング等でもご利用いただけます。

OMOYAの共同リビングとキッチン

KOYA

みかん小屋を改装したコワーキングスペースです。独立デスクには全席オフィスチェア、外部モニターが備えつけられており、長時間のPC作業でも快適に仕事いただくことができます。1階では貸切でワークショップやイベントを開催することもできます。スポット利用だけでなく、HANAREとOMOYAの宿泊者はKOYAを無料利用することができます。

KOYA 1Fのコワーキングスペース

移住し、地域課題と出会ったことで生まれたコンセプト

2016年、私たち夫婦は関西から大三島へ、大阪の会社に所属したまま大三島に移住しテレワーク生活をスタートしました。大三島の暮らしは素晴らしくとても充実した日々を過ごしていましたが、過疎化による高齢化や空き家問題を目の当たりにし、生活

を持続することに不安を覚えました。そこで、自分たちと同じようなテレワーカーであれば、仕事をもってくることができるので、移住に繋がりやすいのではないかと考えました。そして、２０１７年にテレワーカーが大三島に滞在するきっかけになる場として、ワークスペース付きの１棟貸切宿「ＨＡＮＡＲＥ」をオープンしました。しまなみ海道サイクリングルートのちょうど真ん中に位置する好立地ということもあり、観光客やサイクリストに加え、１～２泊の短期の開発合宿や研修に利用いただいていました。

そして、さらに１週間程度の中期滞在がしやすい環境として、ＯＭＯＹＡとＫＯＹＡを２０２１年夏にオープンしました。

コロナを機に増加したテレワーカー利用者

コロナを機にテレワークやワーケーションなど新しい働き方が広がりました。ＯＭＯＹＡとＫＯＹＡはコロナ真っ只中にオープンしましたが、ワーケーションや企業合宿でご利用いただいています。

コロナ前は、ＨＡＮＡＲＥのみの施設ということもありターゲットとして見込んでいた、合宿やワーケーションは１割に満たない利用でしたが、今では利用者の１／３がワーキングステイです。

ワーケーション利用の方は、３日～１週間ほど中期滞在される方が多く、仕事の合間にサイクリングや島のカフェ、道の駅で地元の食材や地ビールを購入して、宿での調理を楽しんでいらっしゃいます。また、ご家族やご夫婦で１週間滞在し、ゆったりと島暮らしを堪能される方も少なくありません。

お客様とタイミングが合えば、私たちもランチや夕食をご一緒させていただくこともあります。

合宿ご利用者のワークショップの様子

移住直後は周囲に同世代の人がおらず不安を抱いていましたが、ＯＭＩＳＨＩＭＡ ＳＰＡＣＥの場をつくったことで、都市部を中心に各地から人が集まり交流が生まれました。

今後の展望

大三島をはじめ過疎地域は、環境が素晴らしくとも仕事が少ないため移住促進が難しい課題があります。テレワーカーであれば、その課題を乗り越えられるのではと思い、まずはテレワーカーが滞在する場としてＯＭＩＳＨＩＭＡ ＳＰＡＣＥを開業しました。

今では移住だけでなく、２拠点生活やパラレルワークなど暮らし方・働き方の多様性が広がっています。そして、私たちも東京本社のＩＴ企業に務める会社員とＯＭＩＳＨＩＭＡ ＳＰＡＣＥの経営者という２つの仕事をするパラレルワーカーでもあります。地方移住×テレワーク×パラレルワークという新たな働き方・暮らし方のモデルケースのひとつとして、発信していくとともに、住む場所に囚われない多様な交流・関係人口のあり方を模索しています。

また、今後の展開としては、引き続きオミシマスペースを中心に、集まったテレワーカーとともにデジタルツールを使った地域課題への取組みや、ローカルビジネスのスタートアップの支援など行っていきたいと思います。

［大洲市］
特集2

移住者を増やすための空き家活用について

一般社団法人キタ・マネジメント 企画課 係長 兼 株式会社KITA代表取締役　井上　陽祐

一般社団法人キタ・マネジメント（以下、キタマネ）や関連会社の株式会社KITA（以下、KITA）は愛媛県大洲市の城下町エリアにて、空き家等を利用して、歴史的資源を活用した観光まちづくりを行っている。私は主に築100年以上、中には江戸期に建てられた家屋を活用・保全するため、それらを宿泊施設などに改修する仕事をしている。大洲の城下町は、400年以上前には現在の町割りが形成され、そこに広がる古い民家は大洲独自の景観を作り出している。近年、これらの民家がドンドンと空き家となったり、更地になったりしていた。1番の原因は少子高齢化である。木や土、紙で作られた日本家屋は、人が住まないと老朽化が急速に進み、結局は解体の憂き目にあってしまう。そのため我々は主に10年以上空き家となっていた民家をお預かりして活用している。これらの民家は雨漏りで屋根に大穴が開いていたり、コウモリやハトが住み着いていたりする。こうなってしまった民家を壊してしまうことは容易である。しかし、一度失われた景観は、どんなにお金を投じても再形成されることは無い。他方、人口減少のなかで、すべてを自治体が維持管理することも、不可能である。そうであればやはり民間事業者により「活用しながら保全していく」というのが正解ではないだろうか。我々は活用・保全の方法を先進事例である兵庫県の丹波篠山市やEU諸国の方法などを参考に、現在では20棟以上の歴史的資源である民家を改修・活用・保全している。

これらの空き家となっていた地域の資源を活用することで、結果的に移住などのUターンも増加している。例えば大正時代に建てられた赤煉瓦造の倉庫は、2018年まではずっと単なる「物入れ」として使われていて、所有者も取り潰してしまおうとしていた。しかしこの倉庫を新しい所有者に買っていただき、当社がお借りして活用することで、南予初のオリジナルクラフトビールをつくる工場として生まれ変わった。この工場では関西圏で料理人として働いていた人物が、醸造家としてUターンして働いている。

臥龍醸造　クラフトビール工場のビール

また15年以上空き家として放置されていた長屋は2階部分を宿泊施設、1階部分をショップやレストランとして活用している。このショップやレストランでは2名のUターンや起業が起こった。1名は茶寮平野屋という賞味期限20分のわらび餅を提供するエッジのきいた和風カフェなのだが、近所にある平野屋製造本舗という和菓子屋が事業拡張の

臥龍醸造　クラフトビール工場外観

ために展開しているカフェである。こちらでは高松市で働いていた平野屋製造本舗店主の実弟がUターンしてお店を切り盛りしている。

茶寮平野屋のメニュー

またOZU＋というサステイナブルな商品を取り扱うお土産屋さんも出来た。こちらでは大洲出身で、東京で働いていた女性が起業してこのショップを運営している。

OZU＋　女性Uターン起業者のお店

このように空き家をうまく活用していけば移住や起業を数多く実現することが可能なのである。この流れをさらにすすめるために、当社ではさらに空き家を活用し移住を促進すべく、愛媛県で初めてのADDress拠点の整備もおこなった。ADDressは㈱ADDressが提供するサービスである。年間4万円（税抜き、個人会員）の会費を払えば全国のADDress拠点200カ所に住み放題となるサービスである。いわゆるアドレスホッパーという、自分の自宅を持たずに転々としながら地方を旅するIT系のフリーランスの方々が多く利用しているサービスであるが、中には東京の大企業に勤めている方などもサービスを利用している。

アドレス拠点　屋上

アドレス拠点　部屋

㈱ADDress社の2021年の調査によると年収500万円以上の利用者が半数を占め、女性の利用も40％以上を占めた。（出典：ADDress多拠点生活 利用実態レポート 2021年版　https://address.love/column/?p=215）また数千人いる会員のうち、ADDress拠点を「移住の検討先として、いずれ移住先を選ぶ際の参考にしたい」と回答した会員は40％以上に上った。空き家を活用し、このような新しいサービスの拠点として活用していくことで最終的には移住・定住につながるマインドの醸成が出来るのである。ADDress拠点はあくまで移住先を検討してもらうための1つのツールである。実際、ADDress会員は1つの拠点に最大2週間は滞在できるため、地方にプチ移住を体験するためのサービスとしてうってつけなのである。今般のコロナ禍でリモートワークが推進され、多くの大企業の企業人もADDress会員となっており、またADDress会員のほとんどが40代以下と、もっとも移住してほしい労働年代人口である。空き家を多方面に活用することで当社では観光に利用するのみならず移住者を増やす施策も実行している。

［内子町］
特集3

移住者はお客さま？！

内子町地域おこし協力隊　岡山　紘明

「移住者」ってだれやねん！

移住とは移り住むことであり、話し言葉で言うと「引っ越し」だ。改めて「移住」と聞くと、なんだか肩肘張っている気がする。移り住んだ土地で、「なにかを始めてやるぞ！」「町を変えてやる！」と言った気合いさえ感じる。僕は「移住者」として鳴り物入りした。いざ住んでみると、地元の人に甘えてばかりの毎日だ。

田舎はカネよりコネ！

愛媛の山間にある田舎町、小田に来て丸3年が経つ。小田に暮らす人の年収は東京の平均年収の1／3の場合もある。実家で暮らし、畑を耕し、いらなくなったものは隣近所で譲り合う。エコロジーで効率的な暮らしだ。コスパが良くてエコな暮らしを実現するためには、お金と同じくらい、いや、お金よりも地元のつながりを大切にしていることに気付かされる。

地元に入らせてもらう感覚

移住すると暮らしのありとあらゆるものがわからない。浄化槽の汲み取り、ゴミ出し、秋祭り、畑の耕しかた。小田のみなさんは嫌な顔をほとんどせず教えてくれる。3年経った今でもわからないことだらけだ。水利組合？ホダ木？住めば住むほど小田の暮らしの奥深さを知ることになる。地元のつながりに入り込むにはまだまだ時間がかかりそうだ。

そばの刈りかたを教わる

昔のおいちゃんたちにも感謝！

最近、小田のお米を売り始めた。日本中に田んぼが広がっている。当たり前のようだが、考えてみれば昔のおいちゃんたちが石垣を積んで、水路を引いて意図的に作ったものだ。当たり前なんかではなく努力の結晶だ。森も川もみんなそうだ。なんの気無しにポッと移り住んできたが、昔、この土地に住んでいたおいちゃんおば

棚田はおいちゃんたちから引き継いだもの

ちゃんたちにも、知らず知らずのうちにお世話になっていたことに気付かされる。

今を暮らす自分がすべきこと

移住者はご近所のみなさんにお世話になって、先祖代々のおいちゃんおばちゃんたちがつくりあげた小田という町に住まわせてもらっている。「移住者」として鳴り物入りしたが、すべきことは「小田の町を今の子どもたちに、より良い形でつなぐこと」なのかもしれない。憲法にも条例にも書いていないが、小田に住んでいる人はきっと、そういう想いで次の世代へのバトンを渡してきたはずだ。

3年間でやったこと

ここで3年間で岡山がやったことを簡単に紹介。はじめに取り組んだのが商店街の元本屋をシェアハウス、シェアオフィス「どい書店」としてオープン。（現在、喫茶や加工品製造業、イベント拠点として運営）。また協力してもらいながら近くで空き家になっていた銀行跡地をシェアオフィス、元旅館をシェアハウス、製材所兼住宅をイベント&宿泊所として運営したり関わっている。

若者が暮らしやすい田舎づくり！

活動が拡がるにつれて移住者も増え、5・6件の空き家に入居した。今、小田では人が減っている。子どもを産む若い世代が増えていないのだ。自分にできることは、おいちゃんたちが積み上げてきた小田を、いかに今の若者にとって暮らしやすくするか。この60年で世の中が変わり、田んぼを耕す農家が減った。時代にあった米づくりや暮らしをつくるのが僕の役割だと思っている。

2020年11月にどい書店の喫茶がオープン

楽しいところに人は来る！はず！

とはいえ、自分は美味しい料理が作れないし、農業スキルがあるわけでもない。なんにもできないのだ（笑）。開き直って「素直に楽しいなぁ」と思うものを手当たり次第やっている。人は楽しいor美しいところに集まる。楽しそう！写真映えするなぁ！美味しそうだなぁ！なんとなく行ってみたい！を作っていけば、人はおのずと来るはずだ。

わからないことは好きな人に聞く！

楽しさや美しさを作りたいと思うが、飲食店の運営や、映えるお店の作り方など、わからないことがたくさん出てくる。そんな時は自分が尊敬する人や「このお店好きだなぁ！」と思う店の運営者に根掘り葉掘り聞いている。恥ずかしくても聞くしかない！そして下手くそなりにやってみる！自分が小田のじいばあや、子どもたちにできることは恥をしのんで足を運んだり、やってみることくらいだ。

妻籠にまちづくりの話を聞きに行く

小田に遊びに来てね！

移住者は偉いわけでもお客さまでもない。地元という努力の積み重ねに乗っけてもらう立場だ。移住者にできることは限られている。地域の課題に悩みながら楽しみながら取り組んでみて、できないことができたら人に聞いて解決する。そうやって努力することが大好きな土地への恩返しなのではないだろうか。30年経った小田が今よりも暮らしやすくなっていれば幸せだ。是非、ちょこちょこのぞきに来てください！

［西予市］
特集4

栗産地で栗スイーツを作り、栗と産地の存在価値を高める

合同会社メニークエスト 代表　藤田　恭裕

地域おこし協力隊で城川町に普通と特別の価値観

栗の実

愛媛県西予市城川町は栗の生産量が県内でも多いところです。

渋皮煮やペーストといった原料加工品やまんじゅうなどの加工品も多く生産されており、私が地域おこし協力隊として城川町にやって来たのも栗を使って何かを作りたいという思いがあったからでした。

とはいえ、最初は何をしたらいいかわからない。何か特別な商品を作らなければ意味がないと自分自身勝手にハードルを上げていましたが、冷静に考えてみると城川にとっての「普通」が都会にとって「特別」ということに気付きました。

それは城川の栗が2Lサイズ以上の大きさの栗が採れるのが「普通」であることや、焼き栗として焼いたら焼き芋のようにホクホクで甘さがあること、そもそも栗自体味にコクがあること、など、都会に住む栗好きの友人が羨むようなポテンシャルを兼ね揃えていたのです。そこで私は「特別な細工はいらない、自然なカタチで勝負しよう」と決めました。

地元の食品加工会社や地域住民の方々が集まる団体など、普段では入ることのできないところに入れたのも地域おこし協力隊という立場だからできたと思います。栗とは何かを一から学び、都会ウケするのはスイーツだと絞り込み、モンブラン作りを始めました。

地域おこし協力隊2年目のときに会社を作っていたので、そこにモンブランも一つの事業として製造、販売を始めました。作り手は地元の女性お二人。器用で郷土料理から和・洋菓子も作ってしまう頼もしいお二人でした。

とはいえ、最初から販路もなく、店頭販売は市内道の駅2か所の販売からスタートし、ネット販売も自社通販WEBサイトを立ち上げましたが開店休業状態。このままじゃまずいと近隣のスーパーや販売店に営業をかけるようになりました。

販路を少しずつ拡げていったタイミングで西予市のふるさと納税返礼品のお話をいただき、エントリーしました。

ふるさと納税を始めて全国のどの地域からご注文を頂くのかがわかるようになったのと同時に、都会の方々は「地方の産物」を求めているのだとわかりました。上述した田舎の「普通」が都会の「特別」という自分の仮説はあながち間違いではなかったのです。

地元出身スタッフと成長する

モンブランを巻いている

そこから自社通販ＷＥＢサイトも都会の方々に響くような作りに変えました。

ふるさと納税を中心に多方面でモンブランをお求めしていただくようになった頃、創成期の女性製作メンバー2名から地元城川町出身の新スタッフ2名に替えて新しい体制にしていきました。もちろん味、作り方、材料も踏襲しました。

タルトホール

数が増えていくほど、今までのやり方が通用しなくなるときもあります。そのたびに生産工程を見直したり、製造に無駄な時間がないか確認したりと、試行錯誤を繰り返しました。これは今も続けています。

苦しくなったときには原点に立ち返り、「城川の栗を世の中に広める」という理念をスタッフ全員で思い返します。今自分達が苦しくてもお客様には関係なく、城川の栗を楽しみに待ってくれている方々がいるのです。

スタッフ一人一人が作業するだけの作業員にならず、少しでもよりよくしていこうという意識を持ってくれたことが会社の原動力につながっています。

田舎は都会に比べて不便なところです。都会のようにものは溢れていません。

しかし、田舎には田舎しかない都会の人が羨むものが溢れています。私にとってそれは城川の栗です。

そのダイヤの原石をどう輝くようにするかはそこに住む人がどう磨くかにかかってくると思います。そのためには日々考えて進化させないといけません。もちろん先人の知恵を覆す必要はありません。でも変化を嫌って進化はできません。

１００００のメーターがあったとして私たちの変化は1か2かもしれませんが、それでも確実によりよいものになってきています。

栗畑

今後の展望と妄想

都会の人が地方に興味を持ち始め、人の行き来が増えてきたと感じます。

しかし反対に、私の周りですが、地方の若者は都会に出て行ったら帰ってこないというのが現状です。様々な要因はあると思いますが、地方での仕事の選択肢が少ないというのが離れていく理由の一つだと思います。

地元の若い世代が仕事を考えるときにメニークエストが一つの選択肢になれるように、もしくはメニークエストを経由して独立ができるような環境が整備できたら盛り上がり方が変わってくると思います。多くの起業が生まれて、若い世代の方々が幅広い選択肢を持てるようにしたいのが私の目標です。

［伊方町］特集5

好きは果たして仕事になるのか、伝統をつなぐための工夫

コーロク株式会社 代表取締役社長 橋田 豊代

「裂き織り」との出会い

私の住む伊方町には、木綿などの使い古した布を1cmほどの細さのリボン状に裂き、ヨコ糸として用いて織り、丈夫な布へと再生させる「裂き織り」という伝統が残ります。

この「裂き織り」と、大海原に突き出た佐田岬半島のダイナミックな自然に出会い、感動を覚え、2018年に広島から移住して早くも4年という歳月が流れました。伊方町地域おこし協力隊員として赴任したばかりの頃は、町内でも役場近くの中心エリアに住居を用意していただきました。

着任2年目に、そこからさらに30キロ西端の二名津という、300人ほどが住む集落に引越し、築100余年の巨大な元造り酒屋の古民家の一室を寝床とし、地域住民とともに改修工事を行い、民泊事業をスタートしました。また2021年夏から、この屋敷の斜向かいの建物を新たに改修し、2022年3月下旬に裂き織りの工房「をへや」をオープン、蔵を活用したギャラリー、軽食の出せるスペースを準備しているところです。

新しい裂き織りの工房「をへや」

佐田岬半島での暮らし

半島の突端に向かって西へと駒を進めるほど、松山市から遠くなり、生活はより不便になるように思われます。しかし、こちらに越してきて、不便で困ってしょうがなかった、ということが不思議なことにほとんど思い出せないのです。

陸の孤島と呼ばれていた半島では、物々交換が今でも暮らしの中に息づいています。私の得意とする小さな何かを差し出すと、新鮮なネギとかサザエになって戻ってきます。

住居のトラブルがあったとしても、知った顔が心配顔で直してくれたりと、自分の持っている資質や資源を分かち合う生活が私の住む地域には残っています。

「便利さ」とは何か？

都会では物や資源を欲しい時に、お金で買えることが「便利さ」なのかもしれません。そこには比較や競争が生まれ、より良いサービスの向上が発達します。

では、「便利さ」をお金で買えない田舎の場合は、お互いに補い合うことがどこまで可能なのでしょうか？私のこれからの人生が、この解を持つことになるのかもしれません。

「幸福三説」から考える

明治の文豪幸田露伴の「努力論」に幸福三説という、幸せを引き寄せるための3つの工夫について書かれた箇所があります。

「惜福」とは、福を使い尽くしてしまわないこと。

「分福」とは、人と福を分かち合うこと。

「植福」とは、自分の力や知恵を持って、世の中に種まきをすること。

私は、佐田岬半島の自然の美しさや裂き織りという伝統文化に導かれ、移住を決心しました。とはいえ、私も人間なもので、頭にくることや悲しい日もあります。そんな時はジオラマのように連なる山々や、大海原に沈む夕日、星空を眺めます。雄大な景色や裂き織りは何も変わらずにそこにあり、心境に変化しているのは自分だけなんだと、気付かされます。

しかし、この風景や伝統も先人たちの努力なくして語ることはできません。少しでも生活を良くしようと石垣を築いたり、生きるために必死に工夫を重ねた結晶が裂き織りです。

私たちが当たり前のように享受している、美しい自然を今の世代が食い尽くしてはいけない。美しい自然を残したければ、美しい自然をつなげる種まきを、裂き織りという伝統を残したければ伝統の種まきをしておかないと次世代に継承されません。

山を守る活動

私は広島で登山会に所属し、週末に山登りを趣味としていました。ある時、佐田岬半島で一番背の高い伽藍山を自分の住む二名津から登るとどれくらいなのだろうかと思い立ち、歩んでみました。伽藍山は標高４１４メートルと高山でないため軽く考えて挑戦したものの、登山道は荒れに荒れ、トゲのある蔦がそこらじゅうに蔓延り、倒木や雑木が道を塞いでいて道を幾度も見失い、遭難しかかりました。その時に気付きました。私がこれまで楽しく登っていた山は、「知らない誰かが整備してくれていた山」であったのだと。

この経験を境に、伽藍山遊歩道保全プロジェクトを立ち上げ、ボランティアを募り、安全な山歩きができる道を整備するようになりました。頂上の生い茂った竹藪の中からは、第二次世界大戦中に使用されていた聴音壕の戦争遺構も姿を表しました。登山道には西国三十三箇所霊場を模した地蔵もあります。歴史ある信仰の山を安全に登れるように、今後も整備を続けて行きたいと思います。毎月第２日曜日に活動を行っていますので、是非ご参加ください！

伽藍山の遊歩道保全活動

自分の資質を知る

幸田露伴は資質について以下のように語ります。

〝凡庸の人であれ最狭の範囲で最高の処を求むるならば世に対して深大なる貢献をなし得ん〟

実のところ裂き織りは、織物の中では簡単な織物です。平織りという最もシンプルな組織で構成されており、細い糸同士の織物と比べると早く織り進むことができるため、織物を経験したことのない人や子供達にも楽しい気持ちで体験していただくことが可能です。この誰でもできる単純な織物だからこそ、どれだけ自分の資質を織り込み、広げていけるかが、私の課題です。

裂き織りを認知してもらうために自分の得意とする分野はなんだろう？単純な技法にオリジナル性を持たせるためにはどうすれば良いのか？などと日々考えます。

現在取り組んでいる商品開発のうちの一つに、愛媛県産シルクと正絹の着物を織り合わせた裂き織りをぬいぐるみのベアにしました。タテ糸は野村産シルクを佐田岬産の植物で草木染めし、縫製を伊方町のベア作家リッキーズベアさんに製作していただいています。今後、この裂き織りベアをベースとして、愛媛県で活躍する職人の方々にアクセサリー作りなどをコラボレーションしていただき、手仕事の素晴らしさを世界に伝えていければと意気込んでいます。

私は凡庸な人で、凡庸な技法しかないからこそ、それぞれの場で活躍する職人たちの知恵を借り、アイデアをつなぎ、発信することが伝統を残す工夫の一つではないかと考えます。

裂き織りベア

［四国中央市］
特集6

「地域活性化」はオーダーメイド 地域の数だけある活性化のカタチ

合同会社 ひととせ 代表社員　菊池　睦

愛媛県四国中央市の山間部、金砂・富郷地区に地域おこし協力隊として着任してから間もなく6年になる。地域おこし協力隊ではざっくり「地域活性化」をミッションとする活動をしていた。地域活性化とはなんだろうか。自分の事例を元に、よく使われていながらほとんどの人がなんとなくしかわからないワードを考えてみようと思う。

地域活性化とは何か。改めて定義を確認してみると、JTB総合研究所によれば、「地方創生の別称。東京に集中している人口を分散し、地方への人流を促し、人口減少に歯止めをかけ成長力を確保する」とある。簡単に解釈するならば、地方に働き手世代を移住させ、衰退していく地域を成長に転換させるといったところだろうか。

では、地域おこし協力隊として着任したこの地区での地域活性化とはなんだったのだろうか。着任時点で既に学校や医療機関だけでなく商店や公共交通機関もなく、当時の人口は200名程度。毎年10人くらいずつ人口減少が進んでいる地域だ。ここから成長への転換はどうすればいいのか考え、実施するのがミッションだった。

まずは何をやるかを決めなくてはならなかった。目標はわかっていても手段がわかっていない。そこでできるのかできないのかは後で考えるとして、地域の人に話を聞きにいった。さぞ、困っていることがたくさんあるのだろうと思っていたが、実際に聞いてみると「困っていることはない」という返事がほとんどであった。

地域内に商店がないため生活用品や食料品も購入することはできない。それは確かに不便ではあるし、着任時にも買い物は市街地へ行く必要があるといわれていたので覚悟はしていたが、実際に住んでみると意外にもそこまで負担ではなかった。お店がないならないなりに対処方法はあるわけだ。車を運転すれば市街地まではそこまで時間のかかる距離でもないし、運転をしない高齢者も近隣に住む家族が買い物をして様子見がてら来てくれている。加えて、当時は軽トラの移動販売もあった。

不便な生活はそこまで問題ではないことがわかった。そして話を聞いていくうちに、人が少なくなってきて寂しいという話も出てきた。そこで、この地域には人口減少への対処を軸にした方がいいだろうと考えることにした。ただ、人口減少への根本的対処は一介の地域おこし協力隊が対処するには大きすぎる問題である。例えば「道の駅を作ってほしい」といわれても、それはもう自治体を挙げてのプロジェクトの規模である。

そこで、人口減少への対処をひとまずやってみようと思い、本当に人が減っているのが問題なのかを検証した。それなりに高齢な人たちだが、畑仕事はみんな元気にやっている。畑の一部を耕作放棄していたある方は「作る体力はあるが、作っても一人では食べきれないし、あげる人も減ってしまった。捨てるために作るのは悲しいので作らない」といっていた。つまるところ、人口の減少が問題というよりは、人口が減少したことによって、人と会ったり話したりする機会が減ったことの方が問題のように思えた。

ここで流行の「交流人口」という単語が出てくる。実際に住んでいなくても、訪れたりその地と関わりを持ったりする人のことを指す概念だ。作った野菜を食べる人が増えれば交流人口も増える。その先に話す話題ができるかもしれない。ただ、地域外の人をあまり受け入れてこなかった地域に、いきなりそれをやってみようは困難なので、労力をかけずに出来ることとして、既に持っている地域外のコネクションを使ってみた。生産者の代わりに他の人とつなぎ、レスポンスを生産者に伝える。それでとりあえずは最初の一歩になっただろう。

一度始めてしまうと、あとは次々やることが出てくる。今までは何もないから紹介する

こともない地域だったが、移住者の目線で見ると紹介したいところはたくさんあったし、毎回地域の説明をするのは大変なので、地域PRも兼ねた紹介冊子を作った。活動地域の全世帯に市報と一緒に配布してもらったところ、大変高評価をいただき、家族に送りたいのでもう何冊か欲しいと連絡をもらった。その後、新聞で紹介してもらい地域外に住んでいる地域縁の人からも担当課に問合せがあったそうだ。

地域のいいところを探す。その地に長く住んでいる人にとってはなかなか気付きにくいことなのかもしれない。エンジンとなって地域活性化を主導して進められるのであればそれに越したことはないと思うが、エンジンがまだまだ元気に動けるのであれば足りないギアを1枚足すだけでも地域全体は回り出す。

難しい課題こそ成功事例をなぞりたくなるが、その成功事例はその土地でだからこそ出来たことだと理解する必要がある。そして、何がよかったのかを理解し、それを自分たちの地域にどう落とし込んでいくのかを考えなければならない。同じ事例は2つとないのが「地域活性化」というものではないだろうか。

移住者もいつまでも「移住者」と呼ばれるカテゴリーに収まる必要はない。元移住者であっても、いつかは地域に住む一人だ。住人が一人増えた。たったそれだけで地域活性化になる場所だってきっとあるはずだ。

四国中央市金砂・富郷地区

［久万高原町］特集7

道の駅を拠点とした地域おこし

久万高原町地域おこし協力隊　江ノ上　敦士

はじめに

夏は四国の軽井沢、冬は四国の北海道と言われる「久万高原町」の道の駅みかわで地域おこし協力隊として活動している江ノ上です。地域の活力源となるべき道の駅での活動状況や、お土産や食べ物の商品開発、今後の展開を発信していけたらと思います。

お土産コーナーの充実で集客アップ

道の駅みかわは、松山と高知を結ぶ国道33号線沿いにあり、愛媛の奥山にある道の駅です。集客的には、数多くの道の駅や産直がある中、わざわざ奥山まで来てもらうことが必要です。

その魅力作りの一つとして、自然派のお客様をターゲットに添加物の入っていない食品やお土産を取り揃えました。個人的に傑作だと思っているのが、「四国organicさしすせそ」です。愛媛の無農薬純黒糖、土佐の天日塩、徳島の有機すだち、小豆島の無農薬大豆と小麦の醤油、南予の無農薬麦みそ等で構成されています。

以上は取組みの一つですが、様々な店作りをやった成果として、自然派の方たちの中で話題になったり、わざわざ遠方から来て沢山の商品を買って頂ける方も来るようになりました。魅力のある商品をラインナップさせることで、誘客でき、地元の産直物や特産物も買って頂けたら地元に還元が出来るため、今後もさらなるお土産コーナーの充実をしていきます。

ジビエカレーの開発

地域おこし協力隊で着任してすぐのタイミングでジビエ肉の解体所が完成し、お土産物を開発出来るチャンスがやってきました。猪の肉を活用して、土産物の開発と話題性を作るにはどうしたら良いか？熟考した結果、パッケージと味にもインパクトのある「激辛イノシシカレー」を開発しました。

激辛イノシシカレー

５回を超えるテレビ取材等、多くのメディアに取り上げて頂き、単なるお土産の開発に留まらず道の駅みかわと久万高原町に話題を作ることができました。

激あまりんごカレー

久万高原町産のりんごを使った「激あまりんごカレー」を開発しました。開発の経緯は、道の駅の業務中、産直物の集荷の際にりんご農家さんに行く機会が何度もありました。りんご栽培は繊細な農業で、キズ一つ・大きさや形一つでも欠点があると商品価値は下がってしまいます。

実際にキズものりんごや小さくて出荷できないりんごを頂いた時もあり、食べてみたら、それがとても美味しいりんごで、「味は一流」でした。

美味しい「りんごが泣いている」どうにか出来ないか？という思いから、すりおろしたりんごと角りんごをふんだんに入れた「激あまりんごカレー」の開発に至りました。

この商品は「激辛イノシシカレー」の対として、TV取材等頂き、話題になっています。

りんごカレー

猪ラーメンの開発

道の駅みかわにて、期間限定で猪骨を使ったラーメンを提供していました。豚骨ならぬ猪骨を使ったスープで、焼き豚ならぬ猪肉を使ったチャーシューを入れ、情報誌等にも取材を頂き、話題を作ることも出来ました。

将来的には、キッチンカーで週末ラーメン屋をしたかったので、開発したレシピは将来のためにもなりました。

猪ラーメン

今後の展開

まずは、お土産物の開発を手掛けたいと考えています。具体的には、トマトのインド風スパイスカレー、りんごの飲むジュレ、果実酒、柑橘系の土産物開発等です。

その他、田舎暮らし体験のコーディネートをしたいと考えています。まさに家族と田舎暮らしをしており、庭に鶏が居たり自然農で田畑をしたり、家具を自作したり薪ストーブの取り付けをDIYしています。私自身の生活と触れ合うことで移住を考えている方のヒントになり、超限界集落等の過疎地域に関係人口を増加させることも含めて、活動を続けていこうと思っています。

最後に個人的な展開としては、キッチンカーを作って、猪ラーメンや自分の開発したカレーを販売していこうと考えています。

田舎暮らし体験

地域おこし協力隊
リレーレポート

大好きな双海を守りたい！あらゆる方向から「双海最高」を全国に

伊予市地域おこし協力隊双海担当／喫茶＆宿ポパイ店主／双海ＦＡＭ　上田　沙耶

双海の夕日

愛媛県伊予市「しずむ夕日が立ちどまる町」双海町（ふたみちょう）。

昔からまちづくりが盛んで、瀬戸内海に沈む大きな夕日を日本一と証明し、売り出してきた町です。松山から西に20㎞、峠のくねくね道を抜けると、目の前にいきなり現れる視界一面の海。夕焼けどき、キラキラ輝く海が目を引く海沿いの国道378号線は別名を「ゆうやけこやけライン」と、トトロのような世界観で高台から海を見下ろす美しい車窓が楽しめる汽車は「愛ある伊予灘線」といいます。

そんな抜群のネーミングで地域ブランディングを確立してきた長年のまちづくりが功を奏し、今では〝海に浮かぶ無人駅〟「下灘駅」や、夕日鑑賞の特等席「ふたみシーサイド公園」には多くの観光客が県内外から訪れていて、ファンも多い町です。

この町で、私は大きく分けて2つの事業をしています。背景とともに以下にご紹介させていただきます。

下灘駅

大好きな〝双海のばあちゃんち〟

双海は父の実家のある町で、私は幼少期から県外に住んでいたものの、毎年帰省で遊びにきていました。帰るといつも親戚が集まり、ばあちゃんが作る鯛めしとからあげ。目の前のシーサイド公園であそんだり、祖父母の営む商店を手伝って地元の常連さんに可愛がってもらったり。海と山しかないこの田舎町の日常は、私にとって特別で、私は双海のばあちゃんちが大好きでした。

しかし、過疎化が進んでお客さんはどんどん減り、祖父母のお店も景気が悪くなっていくばかり。大学生になって一人でよく遊びに行っていたら、「こんな町何もないのになんで帰ってきよるん」「もうこの町もお店も過疎で終わりよ…」とばあちゃんが嘆いていました。

その時に、自分の中に湧き出した〝使命感〟。―この町を守りたい―

1年半悩みまくった末、祖父母の反対を押し切り、両親と暮らしていた横浜から双海に移住をしました。2020年4月、当時大学を4年に上がるタイミングでした。

コロナ禍だったからこそ始まった地域商社「双海FAM（フタミファン）」

地域おこし協力隊着任時最初の仕事は、2週間の自宅待機から…。

衝撃の2週間、夢に抱いていた「ばあちゃんちでゲストハウスをしたい」という構想はコロナ禍ですぐに着手できないと察した私は、大好きな双海を知ってほしい！ファンになってほしい！という思いをコロナ禍でも叶えるために、オンラインショップ「ふたみおうち便」を立ち上げました。双海に来てもらえなくても、町の自慢の美味しいものを全国にお届けすることで、双海の魅力を知っていただけると考えたからです。メインコンテンツは、「ふたみ図鑑」。美味しいものをきっかけに、それが生産された町のこと、そこに暮らす人々や生産者さんのこと、夕日の美しさなどをしっかりと伝えられたら、いつかは双海に来ていただけたり、これからも双海のことを気にかけてくださったりする〝双海FAM（ファン・ファミリー）〟いわゆる関係人口が生まれると信じ、町内を取材して回って力を込めて作った1冊の小冊子を全ての商品に同封しています。

双海FAMのロゴ

かねてから1次産業が盛んなゆえ、流通されると産地・双海の名前は消えてしまうものばかり。双海というこの地で、いろんな想いを背負ってできた生産物に、双海の名をつけてしっかり届けたい。その想いから、主に規格外品を活用した加工品の開発にも注力。協力隊最後の1年は、首都圏に向けて販路開拓に力を入れていこうと思っています。

商品の写真

昭和レトロな泊まれる喫茶店〝ポパイ〟

そうこうしているうちに、色々とタイミングがきて、念願だったゲストハウスも2022年3月より営業開始することができました。

双海に移住することを思いついた当初、祖父は私の移住を大反対。

「こんな町ではやっていけん。都会で大企業に就職して安定した暮らしをしなさい！」

「絶対にこの店ではやらせない。もう帰ってくるな！」

頑固で気の強い祖父から散々な言葉を投げられ、たくさん大喧嘩しました。

言葉ではいくら言い返しても無駄なので、勝手に決断して移住。祖父には一切頼らず自立して生活し、初めての社会人ながらも食を通じたまちづくりの仕事を日々必死にやって、メディアに頻繁に取り上げてもらったり地元の方からお孫ちゃんすごいねと褒められたりすると、祖父も意識が変化したようで、1年後くらいに「そんなに本気で、頑張るとは思わんかった。もう応援するしかない」と認めてくれたのです。

そこで、まずは休業していた喫茶店を大掃除してオープン。ひいばあちゃんから続く、地元のいりこと醤油を使った懐かしい味の中華そばを引き継いでいます。

喫茶店を土日限定で営業すること1年、融資や補助金やクラウドファンディングでの資金調達も達成し、喫茶店の奥にある住居部分を改装して、ついに3年越しの夢を叶えてゲストハウスを始めることができたのです。

「いつまで双海にいるの？」なんてよく聞かれます。若いし女子だし3年終わったらいなくなるのが前提みたいなこの言葉が悔しいですが、私は大好きな双海でずっと暮らしたいし、これからも、ポパイを拠点に、双海でいろんな面白い事業を作れるような会社の設立を目指して日々まい進します！

ポパイ

えひめ暮らしネットワーク通信

えひめ暮らしネットワークの活動について

一般社団法人
えひめ暮らしネットワーク
事務局長 千々木 涼子

「愛媛で自分らしく暮らし働く」ひとたちを繋ぎ、支援することを目的に発足した一般社団法人えひめ暮らしネットワークは、活動を開始して2年が過ぎました。発足直後から新型コロナウイルスの感染拡大により、想定と異なる状況が続いていますが、昨年度は初年度の経験を活かしたオンライン対応のほか、新たな取組みにも着手しました。今回は、昨年度下期の活動についてご報告いたします。

「えひめ地域おこし協力隊・自治体担当職員交流研修会」の開催

昨年の10月13日、14日、2日間にわたり、松山市で愛媛県内で活動する地域おこし協力隊及び自治体の協力隊担当職員が集う交流研修会を開催しました。

今回の研修では「地域おこし協力隊活動と関係づくり」というテーマを掲げ、講演やワークショップ、分科会などのプログラムをこのテーマに基づいて企画しました。協力隊活動において必要不可欠な周囲との関係づくりですが、コロナ禍で地域との関係が築きにくい、協力隊同士がオフラインで会える機会が少ない、など直面している課題の解決にもつながるのではないかと考え設定しました。

青森県田子町で活動する五十嵐孝直氏による事例発表、県内で活動する隊員の事例発表などを通し、今後の活動に活かす気付きや学びを得ることはもちろんですが、コロナ禍における活動や関係づくりについてグループで話し合うワークや繋がりをつくる交流タイムなどを通して、県内の隊員同士での関係づくりの場を設けました。研修後にはさっそく地域を超えた連携が生まれているようです。

また、自治体担当職員に向けた分科会では、地域おこしサポートデスクとして長年活動する野口拓郎氏を講師として制度運用について学ぶワークなどを実施しました。

コロナ禍以降難しくなっていた県外の方のお話を聞くことは、県内で活動する隊員にとっても、隊員を支える職員にとっても大きな意味があったのではないかと考えています。

五十嵐さんの事例発表

「エリア別研修会」・「ローカルビジネス創出研修」の開催

県全体の研修の後、より近隣エリアでの地域おこし協力隊同士の連携を図るた

め、エリア別研修会を実施しました。南予、中予、東予のそれぞれの地域で活動する運営メンバーが企画し、開催しました。コロナの影響で開催時期の延期をしたエリアもありますが、時期を遅らせてでもオフラインで開催した価値のある、地域理解や関係づくりに役立つものとなりました。

また、ローカルビジネス創出研修では協力隊の任期後に地域で起業を目指す隊員に向け、確定申告書の作成や決算書の見方、資金繰りについてといったより具体的な研修を実施し、起業や定住に向けたサポートを行いました。

地域おこし協力隊活動ブログの掲載について

10月から2月にかけて、県内の地域おこし協力隊の活動や地域おこし協力隊についてもっと知っていただきたいと考え、えひめ暮らしネットワークのホームページに地域おこし協力隊の活動紹介ブログを掲載しました。

地域おこし協力隊本人が執筆した活動紹介ブログのほか、えひめ暮らしネットワークの運営メンバーが隊員に取材したインタビュー記事も掲載しています。

知っているようで知らなかった、協力隊員それぞれの地域や活動に対する想いを感じる個性あふれるブログとなっております。地域の魅力もつまっていますので、是非ご覧ください。

掲載されたブログは20以上！

「えひめde仕事体験！」プログラム作成・体験実施

一昨年度に引き続き、「えひめde仕事体験！」プログラムの作成を行いました。このプログラムでは、実際に愛媛県内の実施地域へお越しいただき、体験を通して、愛媛での働き方、暮らし方を体感していただくことを目指し、単なる仕事体験だけではない、愛媛の暮らしや愛媛での働き方を体感できるものとして企画しています。

昨年度は、県内の事業者の皆さまにご協力いただき新たに5つのプログラムを作成したほか、3件の体験受け入れを実施することができました。残念ながら、新型コロナウイルスの感染拡大のより、参加希望者すべてを受入れることが叶いませんでした。しかし、コロナ禍による生活スタイルや仕事環境の変化によって、愛媛県への移住や体験プログラムへの関心が高まっており、注目度の高さや事業の可能性を感じています。

えひめ de 仕事体験！

今年度もオンラインを活用しつつ、感染対策をした上での対面の移住相談や研修など、さまざまな事業の実施に取り組んでまいります。引き続きご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

会員募集中

一般社団法人えひめ暮らしネットワークでは、会員を募集しています。協力隊会員、一般会員、賛助会員がございますので、是非ご確認の上ご登録ください。

また、えひめ暮らしネットワークが運営する内子町のコワーキングスペース『COWORKING-HUB nanyo sign（南予サイン）』では、コワーキング会員の募集をしています。こちらも是非お気軽にお問合せください。

特選ブログ
shin1さんの日記
Vol.55

人間牧場主・年輪塾々長
若松　進一

移住者による地域の活性化

かつて移民（移住）を志してブラジルに渡り、その後帰国して我が町で暮らしている人がいます。その人の話によると日本から地球の裏側ブラジルへ行くのには、何日も船に乗って航海を続けねばなりませんでした。当時は移民先のさしたる情報もなく、国の推進する夢のような移民の話を頼りに、新天地を目指しましたが、見ると聞くとは大違いで、その落差に失望し夢破れての帰国だったそうです。

同じ移住と言っても国外の移民と国内の移住は時代背景も違うし、移住のきっかけも比較にはなりませんが、自分の人生をかけたりする固い決意や、移住先の情報への不安は今も昔も変わりはなく、生まれ育った場所で暮らしている私たちにとって、その冒険にも似た行動には、ただただ感心するばかりです。

日本の中心地と思われる東京から、我が双海町へ本多正彦さん家族４人が移住して来たのは今から9年前でした。最初は「子育て世代を田舎で暮らせたらいいなあ」ぐらいな軽い気持ちだったし、正直双海町が愛媛のどの辺にあるのかさえも知らなかったようでしたが、移住相談会で当時移住担当だった市役所の松本さんと地域おこし協力隊の冨田さんに出会い、地域おこし協力隊に応募しないかとの誘いを受けて心が動き始めました。普通はこのような場合奥さんの説得に時間がかかるのですが、奥さんの実家が松山だったことや奥さんのお母さんの出身地が大分で、都会と田舎の良し悪し両面を知り尽くしていたため、決断は早かったようです。

当時本多さんが移り住もうとした双海町翠地区には、愛媛県内の現役木造校舎では一番古い小学校がシンボル的にあり、地元の人たちがゲンジボタルの保護活動を行い、環境庁（当時）ふるさときものの里百選に選ばれるなど活発な活動を展開していました。しかし少子化・過疎化の影響で児童数が減り続け、このままだと翠小学校の存続そのものが危ぶまれていました、地域おこし協力隊員の本多さんに与えられた職務は「移住促進」という特命でした。市が用意してくれた小学校近くの教員住宅に住み、当時３歳だった双子姉妹の子育てをしながら移住促進の仕事を始めました。その後子どもが少し大きくなると手狭な教員住宅を出て近くの一戸建て空き家を借り、友人の協力を得ながら貸主の了解のもとリフォーム工事に着手し、それなりの設えを得て今は田舎暮らしを満喫しているようです。子どもが小学校に入学するとごく自然にＰＴＡ活動にも加わり、今はＰＴＡ会長として学校運営にも深く関わっています。誘われるまま地域の安心・安全を守る消防団にも入団し、加えてほたる保存会の中心メンバーとして、文字通り地域にどっぷりつかり、今ではなくてはならない存在となっています。

移住による地域の活性化の第一の目的は定住人口を増やすことですが、日本の中心地東京でさえ人口が減少するなど、日本全体が人口減少社会を迎えている今、しかもどの市町村も人口減少に悩み、移住者を奪い合うような昨今では、余程のことがない限り移住者を増やすことなど容易なことではありません。漏れ

聞けばせっかく移住をしても、夢に描いた田舎暮らしと封建的な田舎のしきたりとのギャップが大きく、落胆し離住してしまうケースも多いようですが、本多さんは地元の温かい人情に助けられ、その後、地区内に何人かの移住者も増え、今後もこの地域に住み続けたいと思っているようです。

移住にとって大事なのは移住した地域で所得を得る職にありつけることです。本多さんは東京に住んでいる頃は映像を制作する会社に勤めていました。東京ならそんな仕事は沢山ありますが、こんな田舎にはそんなものは殆どなく、夫婦で色々なアルバイトなどをするかたわら、地域おこし協力隊で培ったノウハウを生かして、これから愛媛県内を目指す移住者にサポートする仕事もしているようで、移住を志す人は勿論のこと、移住で悩みを持った人たちに寄り添いながら相談や助言をしています。

地域には長年培ったその地域ならではの古い文化が息づいています。田舎は手つなぎの連帯を大事にする風潮があります。手をつなぐことは決して悪いことではありませんが、時として手つなぎゆえ外者を内に入れず、内から外に出ることも許さないのです。一方本多さんのような地域外の人が持っている新しい文化もあるはずです。本多さんたちは一人一人の個人が自立した手放しの連帯とでも言うべき生き方をしています。この価値観の違う異文化ギャップを埋めてこそ地域に新しい風が起こるのです。特産品を作ったり、施設設備を整備して交流人口を増やすことだけが地域の活性化ではなく、移住した人たちがその地域の一員として認められ、活き活きと輝いて生きられる社会を目指すことも活性化の大切な視点なのです。地域をくまなく歩き地域の活動にも積極的に参加したお陰で、今では知らない人より知っている人の方が多くなったと喜ぶほど地域に溶け込み、相変わらず本当か嘘か分からない噂話が多いのも田舎ならではの良さだと笑ってつき合っています。

映像作りのノウハウを持っている本多さんたちの指導で、翠小学校は「ふるさとCM大賞」に応募し見事大賞に輝きました。情報発信力の乏しい田舎でこれだけの成果を出し、最小15人だった翠小学校の児童数も校区外通学で通う子どもたちの数も含めると、今では24人になって、数字の上からも大きな成果を上げています。

本多さんにとっては東京が故郷ですが、2人の子どもさんにとってはここ双海町翠地区が新しいふるさとなのです。3歳だった2人の子どもも早いもので、年が開けると愛してやまなかった木造校舎の翠小学校を卒業し、双海中学校へ進学します。その子どもたちは小さい頃から町内の子どもたちと一緒に子ども体験塾に通い、沢山の友だちができています。やがて社会人になってもこの町はまさに2人にとっては母港なのです。

「分からない　東京生まれの　人何で？
田舎目指すか　理解苦しむ」
「この町は　ないものはない　あり過ぎる
ないものはない　開き直って」
「親東京　子どもにとっては　この町が
ふるさとですよ　だからいい町」
「この町を　選んでくれて　ありがとう
縁は異なもの　味なものです」
（若松進一の笑売啖呵）

"MY TOWN" うぉっちんぐ

歩き&定ラテス 月デス

Vol.95

東西の鉱山から愛媛の地層を見る

岡崎　直司
タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

愛媛県がかつて国内有数の鉱山県であったことは、案外知られていない。理由は二つ。まずは現在も稼働している鉱山がほとんど無いために、事実が過去に埋没しているということ。もう一つは、学校で習う鉱山が凡そ別子銅山に特化していて、そこは観光的に今も脚光を浴び続けている分、他の鉱山が目の目を見ない、という妙な現象にもなっている点。事実、筆者自身が昭和の終わり頃に保内町(当時)に住み、そこが銅鉱山で栄えた歴史に溢れていることに気付かされ、ほとんどそれはカルチャーショックのレベルだった。

県内の鉱山分布がよく分かる地図を掲載するので、まずはその分布状況を実感してほしい。この〝見える化〟という意味で画期的な地図は、平成24年度事業で県内の近代化遺産調査があった際、県科学博物館に製作していただいたものだが、今も重宝させていただいている。見てのとおり、例えば銅鉱山(赤い点)分布は東予から佐田岬半島にかけて東西の広範囲に広がり、伊予市(中山)界隈や伊方町にも集中する。それらは、何れも三波川変成帯という緑色片岩(青石)を基調とする地層に特化した分布であることもよく分かる。

さて、県内最東端に当たる新宮鉱山について少し述べてみたい。四国中央市新宮にかつてあった銅山で、昭和53年に閉山した。地元の方の案内で、今もその遺構が山中に残っているのが判明。場所は新宮インターから県道を馬立川(吉野川上流)沿いに北上し、金山橋を対岸に渡り山道をしばらく上がるとその斜面の辺り。市誌によれば明治44年から記述が見えるが、実質的には昭和12年に採掘権を取得した東予金山株式会社からとのこと。前述の橋名もその由来か。(現在のRC橋は同40年架設)その後同14年には日本鉱業㈱が取得し施設の拡充が図られ、16年になって日鉱佐賀関製錬所に売鉱が開始される。山中には発電所跡があり、戦前期の日立製変圧器(同16年製)が認められた。日本鉱業は山口出身の鉱山王久原房之介が創業した日立鉱山が元となっており、ナル

トロッコ軌道も残る新宮鉱業所通洞坑跡

貯鉱庫のじょうご

昭和16年の銘が残る戦前期の日立製変圧器とその発電施設跡

ホド日立が据えられている訳だ。戦後は同24年から新宮鉱業所として独立、通洞坑の表示にその名が見て取れる。山道の沿線にはコンクリート製の貯鉱庫と思われるものや、鋼鉄製のシックナー（選鉱過程のろ過分離装置）なども残っていて往時を物語る。

所変わって、西予市城川町には貴重な県内で唯一現役の黒瀬川鉱山があるのでご紹介したい。昭和31年から稼業されているのは大日本ドロマイト鉱業㈱、その名のとおりドロマイトを採石している。会社は桜の峠トンネルを抜けた田穂にあり、この辺りの地層は秩父帯で、先に述べた三波川帯の南側に即して連なる石灰岩を基調とするエリア。その石灰石が変容してマグネシウム化したものがドロマイトで、土壌改良剤として利用されるので、農業従事者などには馴染みがある。こちらの製品もＪＡなどで市販されているから目にした方もあるかと思われる。

顆粒状のドロマイト

ちなみに西予市は、この太古は海底だった秩父帯の中にあり、その地質要因もあってジオパークを推進している。市生涯学習課の事業として会社のご理解もあり、坑道に入らせていただいた。まさにジオの中枢、ドロマイトの岩盤の中を車で地下200ｍまで進入するのは迫力満点の体験だった。坑道は幅5ｍの鉱柱を残しながら高さ6ｍで掘り進む構造になっている。先端部では鉱石採取の削岩機を作動していただき、地中深くでの社会の下支えを実感し感動を覚えた。

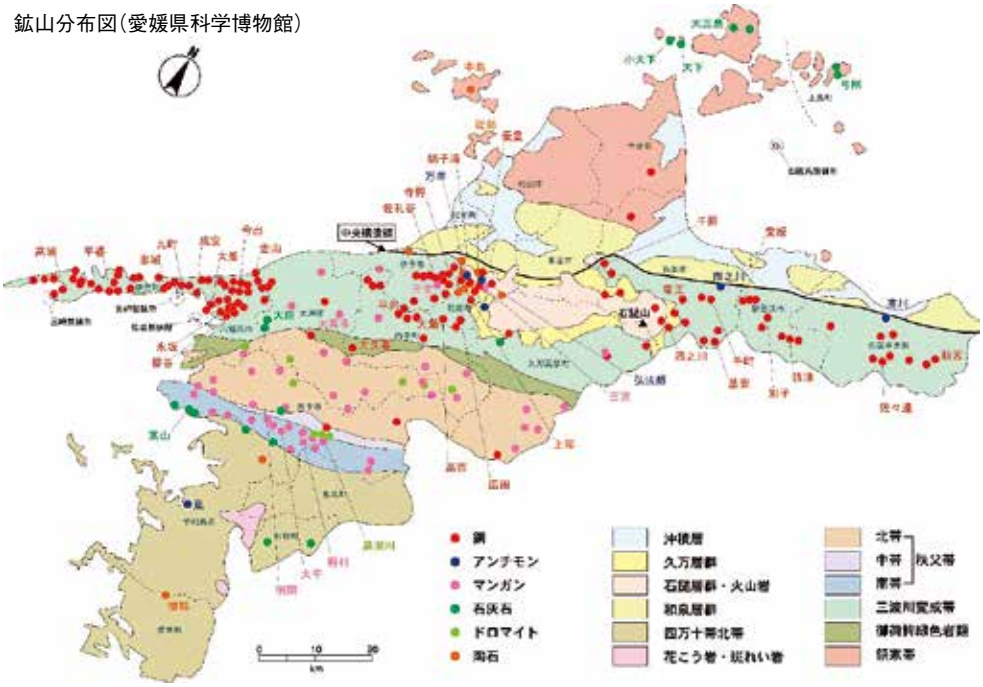
ドロマイトの採掘状況

坑道内部

坑道入口前で

このように銅鉱山や石灰鉱山（高山や関前、弓削）、他にもマンガン鉱やアンチモン（市之川）など、かつての県内は広く鉱山に溢れていた。この分布図を眺める度に、別子のみならず地層の恩恵が実に豊かだった、愛媛の隠れた歴史個性を思わずにいられない。

鉱山分布図（愛媛県科学博物館）



地域づくり人養成講座報告
自主研究論文

「多様な人材（人財）が主役の地域づくり」

今治市役所 健康福祉部 健康推進課 矢野 秀喜

はじめに

私は、5年余り勤めた民間企業を退職し、令和3年度より今治市職員として働いている。従来より、地域づくりに強い関心を持っていることから、今回の「地域づくり人養成講座」に応募した次第である。受講するに当たり目的を2点設定した。1点目は、実際の事例に触れることにより、地域課題への取組みや地域資源の有効活用の手法を学ぶこと。2点目は同じ志をもった参加者との意見交換などを通して、地域づくりに対する考え方や視野を広げることである。講座は西予市明浜町及び今治市吉海町で実施された。両地域の事例から気づきを得たこと、学んだことについて報告する。

新たな発想の外部人材

西予市城川町に地域おこし協力隊として移住し、その後起業した藤田さんによる講義では、これまで地域で見過ごされてきたものが特別な商品に生まれ変わるために何が必要であるかを学んだ。栗の産地である城川町の主婦が、地域行事として公民館でモンブランを作っているのを目にしたことがきっかけとなり、そこに付加価値を持たせたことにより、名だたる名店やパティシエが作るスイーツが連なる中、全国菓子部門で4位の成績を収めたモンブランが誕生した。日常生活の中では〝あたりまえ〟に捉え、伝統や固定観念から新しい物事に挑戦する機会が少ない地元住民に、地域の魅力や資源に気づきを与えてくれるのが外からの視点を有する藤田さんのような移住者である。地域に新しい風を吹き込むには、Iターン、Uターンなどの「よそ者」による新たな発想を取り入れていく必要があると思った。

藤田さんの講演

一方、西予市明浜町渡江地区では、愛媛大学の学生と連携し、主要産業であるみかんの販路拡大を目的としたECサイトの運営を行っている。講座では、「ECサイトの収益を上げるにはどのようにすれば良いか？」というテーマでグループワークを行った。学生からはECサイトに対する熱意や、若者目線でのユニークなアイデアが多く出された。地域外より訪れた参加者からも、新たな付加価値を見い出しPRしていく方法や、社会人経験を踏まえた斬新なアイデアが提案された。これらの意見が合わさり、課

ワークショップ

題解決に向けた画期的な方法を取りまとめることができた。

２つの事例を通して、より良い地域づくりを目指すためには、地域内や組織内の地元住民のみで取り組もうとするのではなく、外部人材や幅広い年齢層、様々な業種の人からの意見を積極的に取り入れることが重要であると痛感した。

地元への熱い思いと行動力

今治市吉海町で多岐にわたり地域活性化事業を展開している矢野さんによる現地案内及び講義では、生まれ育った地であるが故に分かる地域の魅力や強みを活かした地域づくりに必要な考え方を学んだ。人口減少や少子高齢化に伴う耕作放棄地の有効活用を図るために始めたオリーブ木の植樹事業や、先人が掘り起こした足湯の復活など幅広く取り組んでいる。

オリーブ畑

足湯

その背景には矢野さんの〝地元を守りたい、盛り上げたい〟という強い思いがあると感じた。地元を愛し、熟知しているからこそ、地域のポテンシャルを活かした事業が展開できているのだと思う。矢野さんの講義の中で特に印象に残っていることは、思い立ったら実行に移すことが地域活性化の入口であるということだ。実現するためにはどのようにすれば良いか、ビジョンをしっかりと持ち、人脈や補助金などの制度を利活用していくことが重要である。地元住民による地域づくりを手掛ける場合には、行政としては情報の提供や補助制度などで後押しを行い、官民が連携し、足りない部分をお互いが補完し合い推進することが必要であると認識した。

矢野さんの講演

講座を受講して

現地視察した両市の地域づくりの担い手として、西予市の藤田さんのように新しい外の視点を持った「よそ者」と愛媛大学の学生のような地域に根付きパワフルな「若者」。そして、今治市の矢野さんのように郷土愛が育む熱い思いを持って活動している「情熱家」と称される人財がそれぞれに存在している。地域おこし協力隊などの移住者や若者は、知識や経験を生かして地域資源に新たな活用方策を見い出し、地域の大きな推進力となっている。また、地域住民自らの発想や原動力は、地域の魅力や資源をブラッシュアップし、地域活性化事業に結び付けている。行政としては、このような地域づくりのプレイヤーたちが関わり合う場や情報の提供、地域おこし協力隊に代表される人的支援など、地元住民が行うことを側面から支援する形で官民一体となり、持続可能な地域づくりを目指すことが重要であると実感した。今回の講座で学んだことを活かし、多くの人が訪れたい、暮らしたいと思える地域づくりに関わって行きたい。

最後に、講師の方やＥＣＰＲの方々、受講生の皆さんのお陰で、受講に当たり掲げた２つの目的を達成することができました。ありがとうございました。

事業名	事　業　内　容
市町振興助成事業	⑴市町の振興に伴うイベント等助成事業 ⑵情報セキュリティ監査助成事業 ⑶メンタルヘルス対策事業助成金 ⑷災害支援金
市町職員等研修事業	⑴愛媛県研修所での研修事業 ⑵市町職員研修事業 ⑶市町村職員中央研修所（市町村アカデミー）及び全国市町村国際文化研修所（国際文化アカデミー）の受講に係る助成 ⑷関係団体研修事業等に係る助成
情報提供事業	⑴愛媛県市町要覧の発行 ⑵市町振興のための資料配付 「地方財政要覧」等 ⑶地域づくり情報誌発行事業 「舞たうん」、「えひめイベントBOX」
その他	⑴市町関係団体等への助成（愛媛県市長会・愛媛県町村会を経由） ①一般財団法人地域活性化センター年会費 ②日本貿易振興機構（ジェトロ）愛媛貿易センター運営負担金 ③松山空港利用促進協議会負担金 ④自転車新文化推進協会負担金 ⑵愛媛大学の地域医療学講座への寄附

◎令和4年度市町村振興宝くじ発売概要

	サマージャンボ宝くじ	ハロウィンジャンボ宝くじ
発売期間	7月5日（火）～8月5日（金）	9月21日（水）～10月21日（金）
発売計画額	930億円（前年度900億円）	480億円（前年度480億円）

～市町村振興宝くじの収益金等を活用し、愛媛県内20市町の振興に寄与～

公益財団法人愛媛県市町振興協会

◎令和4年度事業のあらまし

当協会は、市町財政の厳しい環境に配慮し、的確な財政運営を実施していくとともに、市町の公共施設整備事業等への資金融資、市町振興事業に対する助成及び人材育成のための研修等、次に掲げる事業を行います。なお、市町村振興宝くじ販売促進事業については、関係団体の協力を得ながら行います。

<table>
<tr><th>事業名</th><th>事　業　内　容</th></tr>
<tr><td>資金貸付事業</td><td>

⑴長期貸付事業

貸付予定枠　25億円（愛媛県協会：20億円、全国協会：5億円）

貸付対象事業　愛媛県知事と協議し同意又は許可を受け、あるいは届出をしている一般会計債の事業とする。

貸付条件

<table>
<tr><th rowspan="2">償還期間
および利率</th><th rowspan="2">償還期間</th><th rowspan="2">据置期間</th><th colspan="3">最近の貸付利率</th></tr>
<tr><th>R3.5</th><th>R3.3</th><th>R2.5</th></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td>5年</td><td>1年</td><td>0.10%</td><td>0.10%</td><td>0.10%</td></tr>
<tr><td>10年</td><td>2年</td><td>0.10%</td><td>0.10%</td><td>0.10%</td></tr>
<tr><td>12年</td><td>2年</td><td>0.11%</td><td>0.11%</td><td>0.11%</td></tr>
<tr><td>15年</td><td>3年</td><td>0.20%</td><td>0.20%</td><td>0.14%</td></tr>
<tr><td colspan="5">本協会基金等貸付細則附則第２条の規定の特例として、財政融資資金の貸付金利を基準とし、理事長が定める貸付利率とする。ただし、当分の間、貸付利率は、年0.1%以上とする。</td></tr>
</table>

償還方法　半年賦元金均等償還

償還日　9月17日及び３月17日

貸付日　令和４年５月24日、令和５年３月24日

⑵短期貸付事業

貸付対象事業　当該年度内に行う必要がある緊急的な公共事業や災害防止対策事業

貸付条件

貸付利率　本協会基金等貸付細則附則第２条の規定の特例として、財政融資資金の貸付金利を基準とし、理事長が定める貸付利率とする。ただし、当分の間、貸付利率は、年0.1％以上とする。

償還方法　一括償還証書貸付

貸付期間　単年度貸付（年度内償還）

</td></tr>
<tr><td rowspan="2">交付金の交付事業</td><td>

⑴市町交付金

令和4年度新市町村振興宝くじ(ハロウィンジャンボ宝くじ)及びインターネット専用全国自治宝くじ【仮称】「クイックワン（新市町村振興分）」の収益金を愛媛県が協会に交付する愛媛県交付金を財源として市町へ交付する。

⑵基金交付金

サマージャンボ宝くじ収益金をもって愛媛県が協会に交付する愛媛県交付金を積み立てる基金積立金を財源として市町へ交付する。

</td></tr>
<tr><td>交付金の対象事業は、地方財政法第32条に規定する事業で、交付を受けた市町は、市町が必要とする当該事業に充当する。</td></tr>
</table>

Information センターからのお知らせ

「えひめイベントBOX 2022」発刊のお知らせ

（公財）えひめ地域政策研究センターでは、今年4月から来年3月にかけて愛媛県内で開催されるイベントを集約した情報誌「えひめイベントBOX 2022」を発刊しました。

今年度は、持ち運びしやすいサイズであるA5判に変更しました。

「えひめイベントBOX 2022」を通して、県内外の多くの方々が地域資源を活用した特色のあるイベントに参加・体験されて、地域の活性化につながれば幸いです。

この「えひめイベントBOX 2022」を先着700名様に無料で配布します。

【注文受付】

ご注文は電話での対応とさせていただいております。
（詳細は、お電話の際に直接お知らせします）

●問合せ先：松山市宮西一丁目5-19（愛媛県商工会連合会館3階）
（公財）えひめ地域政策研究センター　**TEL.089（926）2200**

●配布の方法：センターへ直接取りに来ていただくか郵送となります。
（郵送の場合、送料は自己負担となります）

●受付時間：平日の8：30～17：00（土日祝日は休み）

令和4年度 まちづくり活動アシスト事業の募集

（公財）えひめ地域政策研究センターでは、まちづくり活動の活発化や地域の活性化を促進するために、県内で地域づくりのワークショップやイベントの開催、広報資料の作成などの活動を行っているまちづくりグループに対して、活動費の一部を助成する事業を行っています。

申請方法等の詳細については、ホームページをご覧ください。

まちづくり活動アシスト事業　検索　http://www.ecpr.or.jp/actions/assist-business/

【編集後記】

今回編集にあたり、Uターンの人や、Iターンの人、様々でしたが、移住者の方が各市町で地域活性化に関しいろいろな事例を知ることができました。どの人もそうでしたが、熱い気持ちを持っており自分の住んでいる地域を何とか活性化出来ないか考えている人達ばかりで、これから同じ目標に向かうことが出来れば様々な問題も乗り越えられる強い力を感じました。

人口減少や高齢化が進む各地域では地域づくりの担い手は、地域住民であることはいうまでもないが、地域力の維持・強化を図るためには移住・交流施策を進め地域づくりの担い手不足を解消し、これまで以上に地域外の人材の力が地域に取り込むことが必要ではないでしょうか。

今号の特集が、地域づくりに取り組む皆さまの一助となれば幸いです。

最後に、ご協力いただきました皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

（玉井）

本誌へのご意見やまちづくり活動のトピックスなどがありましたら、お気軽に当センターまでお寄せください。

〒790-0065
松山市宮西一丁目五番十九号
愛媛県商工会連合会館三階
（公財）えひめ地域政策研究センター
TEL 089（926）2200
FAX 089（926）2205
発行／令和4年3月
（公財）えひめ地域政策研究センター
（公財）愛媛県市町振興協会
印刷／平和印刷工業株式会社